



研究発表 I -ア

Google Workspace を活用した

高校地理授業の実践

【発表者】 有馬 昌英／福井県立藤島高等学校

【報告】

1人1台タブレット端末の導入に伴い、Google Workspace を活用した授業実践を紹介した。

①Google Earth を活用した生徒による動画作成

第2学年において、「世界の気候区の紹介」に関する動画を生徒が作成した。Google Classroom に授業プリントや端末操作の説明動画などを掲載し、生徒がいつでも操作方法を振り返ることができるようにした。授業後のアンケート結果から、8割以上の生徒が動画作成に意欲的に取り組めたと答えており、他の分野でも動画作成を行いたいという感想が見られた。

②動画を活用したオンデマンド授業

ワークシートなどに書き込みながら授業を進める様子を撮影した授業解説動画を作成し、Google Classroom に掲載した。

第3学年では、第2学年の地形・気候の復習をリアルタイムで配信後、Google Classroom に掲載した。第2学年では、気候（熱帯と乾燥帯）について、オンデマンド授業を行った。

また、第3学年では、共通テスト対策授業として、問題解説動画を作成し、全4校の生徒が活用した。生徒が自身の学力を把握できるよう、正答率一覧を提供し、偏差値や順位を生徒の Gmail に送信した。共通テスト直前の授業においても、動画を活用した。動画を視聴する、問題演習をするなど、自分に合った学習方法を生徒が選択し、取り組む様子が見られた。オンデマンド授業は、生徒が必要な学習内容を選択していつでも繰り返し動画を視聴することができ、また、関連動画を掲載することで生徒が自身の興味関心に応じて動画を選択し、視聴する様子が見られた。

来年度は、Google Classroom の開設を早めることや、問題解説動画に加え関連する講義動画を掲載することを検討する。

協議では、他校と動画やデータを共有することに関して質問があり、今年度は素地作りとして発表者が動画を作成したが、今後、他校と協力し、動画作成に取り組みたいという話があった。



【参加者の感想】

・動画を上手に活用されており、生徒の主体性を見事に引き出された興味深い取り組みでした。動画を活用するだけでなくデータとして生徒にも先生にもフィードバックされており、新しい教育の在り方が見える御発表でした。





研究発表 I-I

教科・科目を越えた探究心から 造形的な学びの深化へ

【発表者】 伊藤 裕貴／福井県立武生高等学校

【報告】

美術という教科・科目の枠を越え、他教科や他機関との協働による、STEAM 教育を意識した教科横断型授業づくりに取り組み、実践した。

令和2年度は、①石膏彫刻の素材制作～理科（化学）との横断～、②油彩絵の具の油の乾燥について～理科（化学）・家庭科との横断～、③印象派の点描とは～理科（物理）との横断～、④現代版「枕草子」背景画制作（日本画の裏彩色・裏打ち技法）～芸術科（書道）、国語科との横断～、⑤岡倉天心「茶の本」から芸術鑑賞について学ぶ～英語科との横断、美術館連携～の五つの実践を行った。

成果として生徒たちの「学びに向かう力や人間性」を向上することができたが、教科横断等に割いた時間をどう捉えるかという課題が生まれた。

そこで、横断部分をいかにコンパクトにかつ美術にとって濃厚なものにするかを意識しながら、令和3年度は、くらしの中の「使う」デザイン～工業との横断～などの三つの実践を行った。

協議では、「カリキュラムをどのように編成しているのか」や「教科横断型の授業において評価はどのように実施しているのか」、「小学校で図工を教える時に他教科と関連できる教科があれば教えてほしい」などについて話し合われた。また、他の教科の取組みについても紹介された。



【参加者の感想】

・素晴らしい御発表でした。美術科、芸術三科、家庭科が率先して、教科横断型の新しい授業に改善を試みていること素晴らしいと思います。生徒の進路選択が広がったとの感想が全てを語っているような気がしました。

・とても参考になります。美術を軸にして各教科が接続されただけでなく、その各教科同士がさまざまなコラボをしていることに、試聴していた全職員でおどろきました。我々が、できたらいいよね、などと言っているものが福井ではカタチになって動いているんですね。





研究発表 I-U

実践報告 特別展

「わたし、先生になる！～鯖江女子師範学校での学び」

【発表者】 西川 真代／教育総合研究所

【報告】

教育博物館は、全国でも数少ない、教育に特化した博物館である。「誰もが親しみやすく、感動できる博物館」をコンセプトに、ハンズオン展示や企画展・特別展を行っている。

ここでは、特別展「わたし、先生になる！～鯖江女子師範学校での学び」での実践について取り上げた。福井大学附属図書館にて「鯖江女師生を中心とする社会変遷双六図」を発見したことがきっかけで、昭和初期の女子師範学校生徒の一生を描いたものが少ないことや、師範学校についての展示が少なかったことで、多くの人に見てもらいたいと考え、開催を決定した。展示内容については以下の2点に留意した。



- ・学校生活で身近で分かりやすいこと。
- ・当時を想像しやすい物語性のあるもの。

今回の実践は、校歌や学校行事、開校当時の様子などを当時の写真と併せて紹介した。校歌は、博物館の校歌検索システムで視聴可能である。学校での学びの記録は、時代とともに忘れ去られる部分があるが、貴重な資料となるため、今後も残す努力が大切である。全体協議では、これまで脚光を浴びてこなかった資料を活用したことで、新たな魅力に気付くことができた。ジェンダーの視点から捉えると、当時では珍しく女性が公的に活躍できる場があったなどの意見が出された。



【参加者の感想】

・教育掛図の展示について当時の教員を目指す方たちの思いを含めてご説明いただき、大変理解が進みました。ありがとうございました。また、写真を現物だけでなく画像データとして残すべきことについては、自館の業務においても留意すべき点と感じました。参加させていただきありがとうございました。

・1枚の掛け図からあのような素晴らしい展示へ展開していただいた感動がよみがえりました。発表も非常にわかりやすく、展示について再確認できたこともあり、非常によかったです。ありがとうございました。





研究発表Ⅱ-ア

算数・数学科「データの活用」領域における PPDAC サイクルを活用した授業づくり

【発表者】 青木 利憲／教育総合研究所

【報告】

統計的な問題解決活動が重要視されており、算数・数学科における統計的な内容の改善、充実が図られた。統計教育の課題として、教材の不足や教員自身の経験不足、授業時数の圧迫などにより、問題解決を指向する授業が難しいこと、教員が不安感・負担感をもっていることがあげられる。

この課題の克服に向けて、統計的探求プロセスの一つである PPDAC サイクルを、児童・生徒が問題解決に活用していく授業について考察し、小・中学校での実践を通して多面的・批判的に解釈し判断する力やデータを活用する態度の育成に有効であるかを検証した。

授業を構想するにあたり、児童・生徒が問題解決の一連のプロセスを経験できるように、PPDAC サイクルを活用できる題材の条件を整理し、以下の条件を満たす題材での授業を軸に単元を構成した。

条件①：児童・生徒にとって身近で、解決したいと思えること

条件②：PPDAC サイクルを2度回す必然性があること

条件③：結果に影響を与える要素（多変数）が複数あること



3つの実践から、PPDAC サイクルを活用した授業が、多面的・批判的に解釈し判断する力やデータを活用する態度の育成に効果があると考えられる。児童・生徒が使い慣れているアプリケーションを使ってワークシート等を作成することで、効率よく授業を進めることができるようになった。その一方で、三つの実践を提案したにすぎず、データの活用における教材不足が解決できたわけではない。今後、より多くの教員が様々な実践を積み重ね、題材やワークシート等の情報を共有し、学校の状況に応じた題材の選択が可能となることで解決につながると考える。今後も児童・生徒が多面的・批判的な思考を働かせながら PPDAC サイクルを活用し、問題解決できる題材について、小中接続の視点を取り入れるなど、更に研究を進めていく必要がある。

協議では、児童・生徒の批判的思考がどのような姿に表れたかということについて話し合われた。

【参加者の感想】

・生徒自身が PPDAC サイクルをまわせるようになるための工夫が伝わりました。知識、技能だけではなく、生徒が主体的に取り組めるような手立て、大変勉強になりました。

・2回サイクルをまわすことで、データに対して考えを深めることができることがわかりました。児童生徒への取組みとして面白い実践でした。





研究発表Ⅱ-イ

主体的・対話的で深い学びに至る授業展開 ～英語科における段階的に行う対話的な活動の考察を通して～

【発表者】 高橋 武志／教育総合研究所

【報告】

英語の授業では、読む・聞く・書く力に比べて、話す力が身に付いていない」現状をふまえ、「教科書の学習内容等に関連したより発展的な内容について、英語で活発に考えを述べ合う活動の手立て」について研究することにした。

まず、①ペアでのブレインストーミング、②グループでのシェアリング、③教科書の学習内容等を相手に分かりやすく伝えること（リテリング）、④ICT 機器や学習支援アプリを活用して話す力を身につけることができるのではという仮説を挙げた。

次に、仮説を検証するために三つの実践を行った。その中で、批判的思考で教科書内容をとらえたトピックや課題解決型の視点から考えを述べ合う活動を設定したり、リテリング力を身に付

けるために、書くことやシェアリングを手立てのポイントに据えたりした。また、すべての実践において Google Workspace for Education のアプリやロイロノート等の学習支援アプリを活用した。

全体的な成果として、段階的にペア活動やグループ活動を行うことで、英語で考えを共有して述べ合う活動を楽しみながら行うことができた。また、タブレット端末は、考えを共有したりまとめたりする点において有効であった。

協議では、参加者から積極的な質問がなされた。まず、時間数についての質問に対しては、発表者より「計画的に配当した。」との回答があった。また、ICT 活用についての質問に対しては、「単に英単語の意味を調べるだけでなく、表現や関連情報等さまざまな情報を検索し、主体的に工夫を重ねて取り組んだ生徒が多かった。」との回答があった。



【参加者の感想】

・批判的思考や問題解決のプロセスを踏むことで、主体的な学びという視点で授業が改善できることについて御示唆いただきました。

・リテリングから発展的な言語活動に向かう構成で授業をしていましたが、批判的な思考を促す具体的な取組みが、大変勉強になりました。教科研修を行う際、また、学校に戻って授業を行う際に、参考にさせて頂きたいと、強く思いました。ありがとうございました。





研究発表Ⅱ-ウ

マイクロスケール実験の手法を用いた 理科実験教材の開発 ～より多くの生徒が実験できるように～

【発表者】 南 拓実／教育総合研究所

【報告】

理科教育において、生徒の理科で形成すべき資質・能力を育成するために、「観察・実験」や「探究活動」は重要である。しかし、実験を行うにあたって、準備・後始末・実験廃液・実験時間・費用等、多くの課題がある。そこで、本研究では、マイクロスケール実験の手法を用いて実験教材を開発・改良した。①ダニエル電池の実験、②仕切り板を用いた金属イオンの定性分析の実験、③ザルツマン法による亜硝酸イオンの定量の分析、である。経費の削減、実験操作の簡略化、反応を観察しやすくすることをポイントとした。



また、開発した教材を使用して授業実践を行った。実践の効果を分析するため、生徒、授業者を対象に、扱いやすさ、見やすさ、実験時間について、アンケートを行った。ダニエル電池の実験では安価で簡単に作製できる電池の開発、電極の見やすさ、扱いやすさについて高い評価を得た。金属イオンの

定性分析の実験では、安価な教材の開発について高い評価を得た。

協議では、参加者から、小学校でも使える実験等がないかという質問、器具を倒して塩酸等だけがをしたことはなかったかという質問、子どもたちはどれくらいダニエル電池について理解して実験したのかという質問があった。

マイクロスケールを用いた実験器具の開発により、子どもたち一人一人が実験できる機会が増え、科学への理解や思考力が育つという意見、実験時間の短縮により、話し合いの時間が増え思考や理解が深まっていくという意見があった。

【参加者の感想】

・実験教材の開発は、繰り返し実験を重ねてよりよいものにする大変さがあります。今回、紹介していただいた事例もたくさんの苦労があったらうと感じます。その上で、子どもたちにとって、簡単で、誰もができるような形で紹介していただいたのはよかったです。

・一人一人が実験できることや片付けがしやすいなどメリットが多くあること、見た目の観察が少し難しいというデメリットもあるということの両面を知ることができたので、とても参考になりました。ありがとうございました。

・研究の目的や方法、効果の研修が丁寧に行われており、大変わかりやすかったです。小学校でも活用できると感じ、自分もやってみたいと思いました。





研究発表Ⅱ-エ

不登校傾向の児童・生徒に対する支援

～適応指導教室でのピア・サポートと
ソーシャルスキルトレーニングの実践を通して～

【発表者】 河合 孝輔／教育総合研究所

【報告】

不登校の要因の一つとして、いじめやいやがらせで嫌な思いをした、友達とのトラブル、対人関係を築けない、疎外感を感じる等の人間関係が挙げられる。そこで、不登校傾向の児童・生徒の協調性・社会性を高め、対人関係を改善することを目的とした支援の実践を適応指導教室で行った。

令和2年度は、子どもたちの仲間作りを重視し、月1回のピア・サポート活動による集団支援の実践を行った。取り組み後のアンケート結果からもわかるように、児童・生徒の協調性・社会性の向上が見られた。一方で、自分の言いたいことを上手に伝える事が苦手だったり、相手の気持ちを想像したりすることが苦手な児童・生徒もいて、効果が出にくいことがあることがわかった。



そこで令和3年度は、ピア・サポート活動による集団支援にソーシャルスキルトレーニングによる個別支援を加えて、集団支援と個別支援の両面から支援を行うことにした。ソーシャルスキルトレーニングは、そのときどきの児童・生徒に身につけさせたいスキルを担当相談員と事前の打ち合わせを行うなかで決めていき、特に支援が必要な児童・生徒については個別支援計画を立てて個別支援を行った。その結果、児童・生徒の対人関係に改善が見られた。

2年間の実践を通して、不登校傾向の児童・生徒の協調性・社会性を高め、対人関係を改善させるための支援として①ピア・サポート活動による集団支援、②支援計画を生かして個別支援、③支援者同士の連携、④日常の支援活動の中での取組みの四点が効果的であると考えた。協議の中で、学校やSSW（スクールソーシャルワーカー）との連携についても話題になった。



【参加者の感想】

・児童・生徒と教師の認識のずれ、全体に対するアプローチのみならず、個別の支援を組み合わせたという視点は大変参考になりました。ありがとうございました。





研究発表Ⅲ-ア

学校独自で結果を比べ分析できる調査へ ～オンラインでの調査で新しく見えてきたこと～

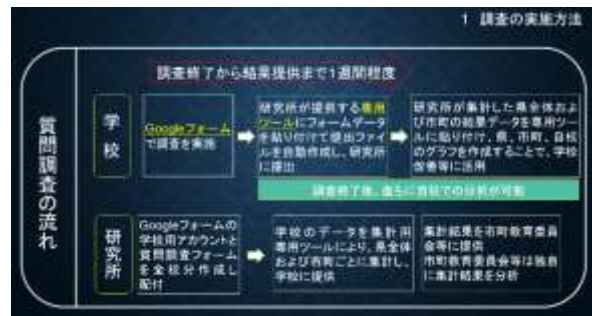
【発表者】 脇本 裕之／教育総合研究所

【報告】

令和3年度から県学力調査における質問紙調査を、紙媒体からタブレット端末等を使用した調査に移行した。タブレット端末等を使用したことで、学校では、調査終了後、直ちに回答状況を把握することが可能となり、迅速な授業改善や学習支援、学級経営、学校経営への活用ができるようになった。また、学校アンケート等に活用することで業務改善にもつながる。調査実施に関する一年間の取組みを報告した。



Google フォームと教育総合研究所が作成した専用ツール(Excel)を活用して、7月に試行調査、11月に本調査を行った。試行調査では小学校第5学年と中学校第2学年を対象に実施したが、児童生徒や教員のICTスキルに課題が見られた。本調査に向けて、Google フォームや専用ツールを改善し、調査実施に関する説明動画を充実させるなど、円滑に実施できるようにした。



本調査では、調査対象を小学校第3学年から中学校第3学年までに拡大して実施した。結果分析では、対象学年を拡大したことで可能となった学年間の比較や質問項目同士のクロス分析等を行った。また、本調査での課題として、児童生徒が回答に時間を要したことや同時に多くの学級が実施したことで通信障害が発生したことなどが明らかになった。今後は、質問内容や質問数の見直し、関連分析の充実、教科別調査のCBT化について検討していく予定である。

参加者との情報交換では、調査結果の学校への還元について質問があり、集計結果と分析結果を提供していることや分析結果についてオンライン研修を開催していることについて説明があった。また、このようなデータの取り扱いには専門的な知見が必要となることなどが議論された。

【参加者の感想】

・児童生徒の回答について、専用フォームを活用し、直ちに分析できることで、児童生徒の些細な変化について即座に行動できるようになると感じました。即効性があることで、授業改善に活用できることを期待しています。





研究発表Ⅲ-イ

社会創生プロジェクトの研究

【発表者】

川崎 耕介

福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

【報告】

学校全体で取り組む社会創生プロジェクトの研究を通じて、子どもたちは、予測困難な未来を生き抜くために必要な「自律」「協働」「貢献」に関する資質・能力を9か年とおして身につけていく。そんな社会創生プロジェクトの学びから見てきた子ども、教師の変容について発表した。

総合的な学習の時間（生活科）と国語科の時間、週に3時間を社会創生の時間として9か年すすめていく。最初は教師がリードしていくが、6年生から9年生にかけては子ども主体で学びが展開されている。

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
総合的な学習の時間	社会創生プロジェクト	社会創生プロジェクト	社会創生プロジェクト	社会創生プロジェクト	社会創生プロジェクト	社会創生プロジェクト	社会創生プロジェクト	社会創生プロジェクト	社会創生プロジェクト
国語科	国語科	国語科	国語科	国語科	国語科	国語科	国語科	国語科	国語科
生活科	生活科	生活科	生活科	生活科	生活科	生活科	生活科	生活科	生活科
算数科	算数科	算数科	算数科	算数科	算数科	算数科	算数科	算数科	算数科
理科	理科	理科	理科	理科	理科	理科	理科	理科	理科
社会科	社会科	社会科	社会科	社会科	社会科	社会科	社会科	社会科	社会科
外国語科	外国語科	外国語科	外国語科	外国語科	外国語科	外国語科	外国語科	外国語科	外国語科
音楽科	音楽科	音楽科	音楽科	音楽科	音楽科	音楽科	音楽科	音楽科	音楽科
体育科	体育科	体育科	体育科	体育科	体育科	体育科	体育科	体育科	体育科
美術科	美術科	美術科	美術科	美術科	美術科	美術科	美術科	美術科	美術科

例① 第2学年「スマイルプロジェクト」

休校中に作ったおもちゃを紹介したりお互いに遊んだりすることを通して、アンケート用メニューブックやおもちゃの説明書を制作するなどしてみんなが笑顔になるプロジェクト。

例② 第3学年「それいけ！おそうじ隊」

幸せって何だっけ？－生きる力を考える－のテーマから具体的な活動を考え、おそうじ隊を結成し学校をきれいにしていき、さらにみんながきれいにしようとする心がけにむけて、おそうじ会社の設立に至るプロジェクト。



それぞれのプロジェクトは発意、構想、模索、遂行、省察の学習プロセスを繰り返すことで学びを醸成させていく。評価においては、感想や資料をもとにした自己省察や他者との語り合いによる価値づけを行い、映像を振り返ることで自己の学びの成長を確認するなどして行っている。今後は、カリキュラムの中で社会創生プロジェクトについて話し合いをする時間をいかに設けるか、学活の時間を含め検討する予定である。

【参加者の感想】

・学びの過程がとても面白く、子どもたちと共に悩みながらも楽しんでおられる姿が想像できました。全体を見渡したカリキュラム・マネジメントを完成させなくてはと思うと困難さばかりが先にたってしまいましたが、軸になるところから広げていく、常にカリキュラムを練り直すということをお聞きして、まずやってみる、やってみたいということが大切だと感じました。





研究発表Ⅲ-ウ

生徒の羅針盤として ～学びの自走化～

【発表者】 岸川 研司／福井県立大野高等学校

【報告】

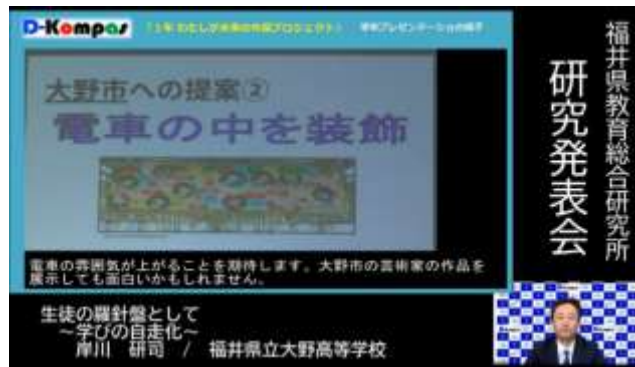
大野高校では「D-kompas」というスローガンのもと、学校教育目標・教育課程・授業の3つを「リンク」させて教育活動を実践しており、その取組みについて紹介した。

「D-kompas」は目標に向かって進む生徒を教員が羅針盤のように支援するという意味で、自主自立の精神を養い、生徒が自走化できる取組みを行っている。①運営組織②D-Time③総合的な探究の時間④互見授業の4つの柱によって「D-kompas」は推進している。

総合的な探究の時間では、各学年で重点的に取り組む内容を設定し活動を進めている。今回の報告では、1年生が行う「わたしが未来市長プロジェクト」につ

いて紹介された。このプロジェクトでは、大野市役所と連携し、各班で様々なテーマを設定し、フィールドワークをとおして、大野市の活性化についてリサーチ活動を行う。成果を発表する際には官公庁、民間、地域の視点に立ち、当事者意識をもって大野市の現在の取組みと今後必要なことを提案する。最終的には中間発表を行い、クラスコンペ、学年コンペを行い、大野市長に提案する。これらの活動を通して自主自立の精神を育み、社会に貢献できる人材育成を目指す。

参観者からは、スクールプランを利用して、生徒の目指すものがあるとさらに、生徒の自主性が身に付くのではないかという意見が出された。



【参加者の感想】

・生徒の自主的な学びを保障する様々な取組みがなされており、大変参考になりました。

・これからの学校と地域の在り方を示唆するものでした。生徒の発表の場を市長へのプレゼン等にするにより、意識付けがしやすくなると感じました。





研究発表Ⅲ-ウ

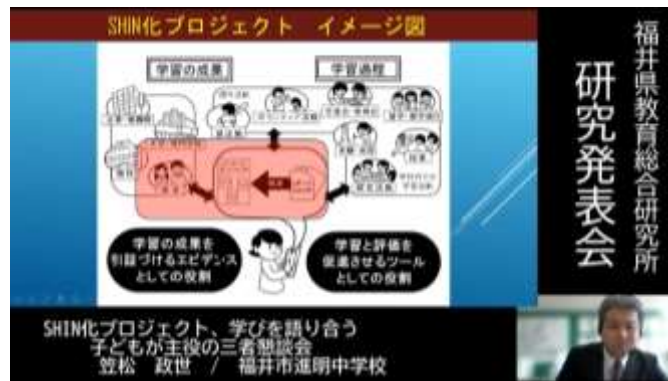
SHIN化プロジェクト、学びを語り合う 子どもが主役の三者懇談会

【発表者】 笠松 政世／福井市進明中学校

【報告】

福井市進明中学校では、生徒が主役の学校づくりを目指し、学校の取組みを考えた。その中で SHIN 化プロジェクトを立ち上げ、それを柱にしながら、学校改革を行っている。

今回の報告では SHIN 化プロジェクトの取組みの中でも、生徒が自分の学びを保護者、教員に伝える場である「子どもが主役の三者懇談会」について詳しく紹介した。生徒は学習の成果をポートフォリオにまとめ、それらを evidence として、保護者に発表する。このような活動を通して、自分を客観的に見る力（メタ認知）を育成する。実際には、理科の実験のレポートを見せ、その考察を語



ったり、音楽の授業で学習したギターで弾き語りを行ったり、鉄棒の動画を見せ、技の習得までの過程を説明したりと、成果物に限らずパフォーマンスによる発表も行われた。このような取組みによって生徒は自分自身の成長を感じ、教師自身は業務改善、授業改善につなげている。一方、保護者と担任がじっくり話す時間は確保しにくいという課題も見られた。それらの意見も踏まえて、2年生や3年生が下級生に発表する「大 SHIN 化」プロジェクトに向けて進んでいる。

協議では、これらの取組みは、生徒が学んできたことを発表するよい機会であり、保護者は第三者の立場で話を聞くことができるため、とても興味深い取組みで、福井のよいモデルとなるなどの意見があった。

【参加者の感想】

・子どもが主役の三者懇談会の実践は、大変参考になりました。とても素敵なお実践で、小学校も高学年であればできると感じました。メタ認知力が大切だと思うので、こんな風に PDCA サイクルを回しながら実践を重ねていくことは本当に効果的だと感じました。





研究発表Ⅳ-ア

自律して生きる力をはぐくむ

～千代田区麴町中学校の取組みから～

【発表者】 羽生 裕美／千代田区立麴町中学校

【報告】

麴町中学校では、自律して生きる力を育むために、「対話・マネジメント力・当事者意識」をキーワードとして様々な取組みを行っている。

【生徒支援における取組み】

①自己決定させる3つの言葉 ②全員担任制

①「どうしたの?」「どうしたいの?」「先生には何が支援できる?」と声かけし、生徒が現状をメタ認知できるように促し、必要に応じて支援することを繰り返すことで、SOSを出せる生徒を育てることを目指している。

②学年の教員全体がチームとなり、生徒を見守っている。メリット・デメリットはあるものの、教員が互いに思いを話せる学年団となり、いろいろな場面を想定し対応している。

【生徒の主体的な学びのための取組み】

①単元テスト ②A I型教材 ③個の学び ④生徒主体の委員会活動

①単元の終わりにテストを行うことで、自分の弱点を知り、人に聞いたり調べたりして学ぶことを繰り返し、学びのスタイルを身につけることを目指している。

②課題に応じてA I型教材「Qubena」等を用いて「自学」を行い、その後に「協学」で学び合う授業の流れを紹介した。以前と比べると、同じ学力に到達する時間が短くなり発展学習の時間を捻出できるようになったこと、生徒が隙間時間に学習できることが利点として挙げられる。

③「フレームワーク」では、教科の特性に合わせたフレームを用いて、ノートで思考を「見える化」する。「P&Pタイム」では、ビジネス手帳を活用しマネジメント力を伸ばすことを目指している。

④避難誘導訓練では、当事者意識をもって取り組むために、生徒たちで目標を考えたり生徒の代表が講評をしたりしている。

発表後の協議では、教員の研修のもち方や全員担任制のあり方について質問があった。発表者からは、研修の時間は特に設けていないが、日々教員同士で情報共有し、目の前の生徒に合わせてよりよい方法を検討し続けていると回答があった。



【参加者の感想】

・生徒や教員の移り変わりがあれども、軸をぶらさずに、生徒と関わっていくこと、その中で周りとの共有がとても大事だということがよくわかりました。ありがとうございました。





研究発表Ⅳ-Ⅰ

ストーリーある学びを子どもと共につくる

【発表者】

藤川 洋平

福井大学教育学部 附属義務教育学校後期課程

【報告】

VUCA 時代、「自律的な学び手」が求められる。福井大学教育学部附属義務教育学校の研究主題は「自律的な学びへのイノベーション」「探究するコミュニティを培う」である。教師の省察から見えてきたもの「教師が考える学びのストーリー」「教師が考える学びの価値」と子どもの省察から見えてきたもの「子どもたちの学びのストーリー」「子どもが感じる学びの価値」の間にずれを感じ、両側から授業をつくっていく必要性から、この研究をすすめてきた。



算数/数学科のチャレンジの中で、「学びのつぶやき」と「省察シート」がある。毎時間、生徒の「学びのつぶやき」により、教師は学びのストーリーを確認し授業をすすめることができる。また、単元の終わり等の自分の考えや思考についての生徒の振り返りにより、教師は今後の学びのストーリーにつなげていくことができる。その他、単元や領域、学年を超えて学びをつなぐ、教科を超えた学び（STEAM 教育）がある。



実践では、9年生「平行線と線分の比/相似な図形」において、①校舎と人が同じ大きさに見える写真の設計図を作ろう②床アートをつくろうを紹介した。①では、生徒から写真をもとに問いが生まれ、まず個人で考え、班で話し合い、他教科での学びを活かして考える様子が見られた。さらに、この振り返りから生まれた次の問いを全体で共有し、次の展開②につなげていく実践を紹介した。

学びのつぶやきから次の学びをつくっていくことで生徒の学習意欲が向上し、また、STEAM 教育の実践により学びがつながり生徒がよりいっそう数学の価値を感じることができた。

今後、時間がかかることや他教科とつながることで複雑性が増すことなど課題もある中、さらに生徒の学びの筋で展開していける実践に取り組んでいく。

協議では、学びのストーリーを生徒のみでつないでいくことは難しく、教師はどうすればよいか、また、学びのストーリーの保存をどうするか、ICT 活用も含めて、質疑応答があった。

【参加者の感想】

- ・子どもの文脈を大事にされた授業づくりをされていて、勉強になりました。教科横断的な視点からの授業も魅力的でした。
- ・学習内容の系統性を意識した取組みが魅力的だと感じました。





研究発表Ⅳ-ウ

福井県版ポジティブ教育プログラムの実践研究

～小中一貫校、市全体での取組みを通して～

【発表者】 仲野 聡美・有田 留美子／教育総合研究所

【報告】

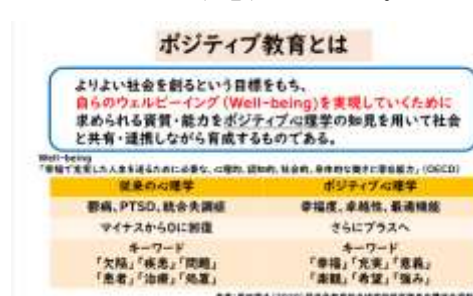
ポジティブ教育の定義は「自らのウェルビーイング（幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な働きと潜在能力）を実現していくために求められる資質・能力をポジティブ心理学の知見を用いて社会と共有・連携しながら育成するもの」であり、マイナスの心理状態を0の水準に持って行くことを目指すのではなく、「幸福」や「充実」といった「さらにプラス」の心理状態を目指すものである。

福井県版ポジティブ教育プログラムとは、「幸福を自ら創り出していく力」を育てるためのプログラムであり、ソーシャルスキル教育、ピア・サポート活動、レジリエンス教育の3つの活動を柱として展開されるものである。また、持続可能な幸せを育む知恵として頭文字を集めた「THRIVE（繁栄・成長）」の精神も活動を支える考え方となる。

この度は小中一貫校として角鹿小中学校での実践研究と、大規模校・地域の実践例として鯖江市全小中学校での実践研究での成果が紹介された。

福井県版ポジティブ教育プログラムの可能性として、教師が同じ価値観で教育活動に取り組むことができること、児童・生徒のどの発達段階においてもアレンジして実践することができることなどが挙げられ、今後の方向性も示された。

参加者からは、アンケートによって集められた数値に頼るのではなく、場面によって挙げられた声の蓄積を大切することでよりよい取組みになっていくのではないかという意見があった。



【参加者の感想】

・盛りだくさんの内容、具体的な実践内容を聞かせていただき、大変勉強になりました。カリキュラムマネジメントの視点、協働の取組みで、実際の場面をイメージしながら聞くことができました。ポジティブ教育プログラムを初めて拝見したので、とても興味深かったです。





研究発表Ⅲ-エ

学びの変容 ～タブレット活用で

学びを変える 児童・生徒が変わる～

【発表者】 林 淳子／教育総合研究所

【報告】

GIGA スクール構想元年、学校における ICT 活用の促進を目的に様々な研修を実施した。悉皆研修では、教員のキャリア・職階に応じて ICT タブレット活用についての研修を行った（管理職：意識啓発、中堅教員：知識・技能の習得演習とマネジメント力育成、若手教員：知識・技能の早期習得）。校種別研修では、学習支援アプリケーション別のオンライン研修の実施と、先進校における実践事例の収集をした。その他、教員向けに通信「Hello, Tablet」を発行した。

■授業への ICT 利活用の事例抜粋

◎画像や動画を利用する・・・長期休業中に植物の成長記録を配信。家から全員が観察し画像データの記録が可能。

◎意見や考えを共有・整理する・・・体育の授業で、JamBoard を用いてバレーボール作戦会議。

◎共同編集で活動する・・・Google ドキュメントで英語の文章をグループで編集。自然な役割分担で協働的な学びにつながった。

◎遠隔での合同授業・・・中学生と高校生の遠隔ディベートに、個人・グループ毎に参加。普段接する機会のない相手から新たな学びの視点を得られた。

◎児童生徒の表現手段の多様化・・・地元スーパーマーケットの紹介動画作成。情報収集・構成力・相手を意識して伝える力の向上につながった。

来年度は、教員のキャリア・職階に応じた悉皆研修に加え、小中研究主任・高校カリキュラム担当・生徒指導担当など対象者を拡大した研修の実施や、デジタル・シティズンシップ教育の推進に取り組む予定である。

発表後は、県内のタブレット活用状況や他県のタブレット端末活用推進の取組みについて、参加者と情報交換した。



【参加者の感想】

・ICT の効果的な活用が子どものよりよい学びにつながることを考えると、教師のスキルアップおよびデジタル・シティズンシップについての十分な理解が必要だと感じました。

・タブレット活用で学びが変容する実践例が多くあり、どのように子どもたちが学びを変容させていくのかが分かりやすかったです。





講演会

「主体的・対話的で深い学び」の実現と学習評価

國學院大學人間開発学部 教授 田村 学 氏

【報告】

國學院大學田村教授による講演会は、オンラインにて開催され、県内外から 200 名を超える教育関係者のご参加をいただいた。

前半は特に主体的・対話的で深い学びの「深い学び」のイメージを共有するために、事例とともにお話いただいた。その中で、今までばらばらだった個別の知識・技能をつなげ、関連付けて構造化し、「駆動する知識」へと発展させることで、自由自在に使える知識となることを説明され、そのためには、授業において「話す活動（展開）」「書く活動（終末）」などアウトプットする機会をいかに適切に位置づけるかが重要であると述べられた。



後半は「学習評価」についてお話いただき、評価規準を作成するための 2 つのポイントとして、「言語要素（サンプル）」と「表現形式（フォーマット）」を提案された。これらを各教科で落とし込むことで、子どもの姿をより確かに言語化でき、信頼性、妥当性のある評価規準をつくることができると説明された。

質疑応答では、授業の「振り返り」の手法が話題の中心となった。田村教授からは、まず考慮すべき点として、発達段階に合わせて文字言語だけでなく、身体・絵・図など多様な表現方法を用いることや、子どもたちが書きやすくなるような教師の工夫と支援が必要であることをお話いただいた。その他、参加者は、評価基準の明確化によって、授業が変わり、授業水準の向上に繋がること、そして振り返りも含め、授業の終末をより丁寧に大切にすることで、子どもたちの知識の定着や、資質能力の自覚、手応え、自己変容の気づきに繋がっていくことなどを学ぶことができた。



【参加者の感想】

・評価についてのフォーマットを用意しておくことで、授業設計精度が上がるという説明は納得でした。指導と評価の一体化における、授業改善の部分と合致致しました。言語サンプルから考えてみたいと思います。

・深い学びを実現する授業をについて具体例を通して考えることができました。

評価規準の作成について、新たな視点を獲得することができたと思います。ありがとうございました。

